御所本『三十六人集』（宮内庁書陵部蔵）の筆蹟と筆者

酒井茂幸*

はじめに

『三十六人集』とは、藤原公任が編纂した『三十六人撰』に撰入された三六人の家集の集合体のことである。現存本は一類・西本願寺本系統、二類・歌仙家集正保板本系統、三類・宮内庁書陵部蔵御所本（以下「御所本」と略称）（五一〇―一二）系統の三系統に分類される(1)。この御所本『三十六人集』の個々の家集の殆どは従来異本あるいは孤本とされてきたが、冷泉家時雨亭文庫蔵本の影印公刊により冷泉家所蔵の資経本・承空本・素寂本等を親本として書写されたことが明らかになっている(2)。書写年代は東園基量『基量卿記』の天和二年（一六八二）正月の二件の記事により天和二年正月以前、すなわち延宝年間末から天和元年であることが判明している(3)。近時この時期の書写で筆者目録を有する御所本『源氏物語』（五五四―八）の筆蹟と対照・同定したところ御所本『三十六人集』の筆者がほぼ確定した。また、御所本『源氏物語』から知られる筆蹟の筆者は、貞享二年（一六八五）五月に冷泉家本を転写した（後掲『中院通茂日記』）御所本『四条宮下野集』等の筆者の究明にも適用できる。

本稿では御所本『源氏物語』の筆者目録を紹介しつつその筆蹟が御所本『三十六人集』の筆跡と照応することを図版により具体的に示し、筆者を明らかにする。そして、貞享二年に冷泉家本を親本として書写された御所本歌書群の筆者の究明について今後の見通しを述べたい。

二　御所本『三十六人集』の書写年次

御所本『三十六人集』の書写年代は従来、近世極初期から寛文以前とされてきた(4)。また、貞享二年の書写という説もある(5)。ところが、まず『基量卿記』天和二年正月九日条に以下のようにある。

猶旧冬被仰出家集〈信明集／一冊〉・朗詠〈従瑠璃至夏夜〉書写献上了、

と見える。禁裏から基量に書写・献上を仰せ出した記事である。「家集〈信明集／一冊〉」は、禁裏に収蔵されたと思われ、現存の禁裏本から該当する本を探すと、御所本『三十六人集』所収『信明集』と御所本『信明朝臣集』（五〇一―一七）が該当する。後者の法量は、縦一六・六×横一七・七糎、装訂は綴葉装で、表紙は飴色の花菱繋ぎの蝋染であり、貞享二年四月五月の冷泉家本の書写本の類型(6)に当てはまり天和二年の書写ではない。自ずと御所本『三十六人集』所収本が浮上し、この本の筆蹟を後に述べる通り御所本『源氏物語』（五五四―八）の筆蹟と対照させると、筆者目録に「東園宰相」とある澪標巻に合致する。当該記事は霊元天皇が

*さかい・しげゆき
埼玉大学教育機構非常勤講師

現在の御所本『三十六人集』の編纂のために基量に分担書写を下命したことによることではないか。というのも、『基量卿記』天和二年正月一八日条に次のように見える。

十八日、晴、禁中三毬打如例、戸田山城守(忠昌)依関東下向也、稲葉丹後守(正通)同参於男未被下御下也、大樹へあんべら・卅十六人家集〈諸家・門跡・摂家／筆、外題新(後西院)院勅筆〉クワリン箱ニ入、紫緒銀之金物蔵之、書付冷泉少将少将(為綱)外家目六武者小路少(実陰)将書之〉朗詠〈諸家筆〉二巻・黄金二枚、戸田山城守へ被下也、

これは、霊元天皇が、京都所司代の戸田忠昌と稲葉正通（『柳営補任』）が関東下向するに際して江戸幕府へ「あんべら」「卅十六人家集」等を持参した記事である。やはり注意されるのは、「卅十六人家集」の記載である。割注に記された本文の書写形態や外題の書写者は、御所本『三十六人集』が寄り合い書で後西天皇宸翰の題簽を有し照応する。霊元天皇は正月九日以降門跡・堂上公家の諸家から献上された書写本を一八日までに集成し『三十六人集』として編纂したものと思われる。御所本『三十六人集』は霊元天皇の禁裏における個別の複写事業として成されたことが会得されよう。

なお、この御所本『三十六人集』との対比から、橋本不美男は、桝形本の綴葉装で蝋染表紙の同装同形の二〇家集を「定家本系三十六人集」と分類した(7)。橋本が「定家本系」と称したのは、この中で、定家筆本あるいは定家・坊門局両筆本を臨写した本が五本存在するためであった。以後、冷泉家時雨亭文庫蔵本の影印公刊により研究が進展し、「定家本系三十六人集」の一五本が、定家筆本乃至は定家・坊門局両筆本に加え、宝治元年本・資経本・伝行成筆本などの冷泉家時雨亭文庫蔵本を親本とすることが明らかになっている(8)。「定家本系三十六人集」二〇本に見出される書誌的類型は、前述の貞享二年四月・五月の冷泉家本の書写本の類型に合致する上、冷泉家本の転写本の書目をまとめたとされる(9)宮内庁書陵部蔵『歌書目録』の「冰甲乙」に全て見られ、貞享二年四月五月に冷泉家本を親本として書写されたものと考えられる。

次節では、御所本『源氏物語』の筆者目録の筆者名を掲出した上でその筆蹟を御所本『三十六人集』のそれと対照させ、御所本『三十六人集』の各家集の筆者を明らかにする。

三　御所本『源氏物語』の筆者目録と御所本『三十六人集』の筆者

まず御所本『源氏物語』に附属される筆者目録を全文翻刻した上で官位記載の筆者名を比定する。

源氏目録　筆者目録(姓名)

源氏目録

桐壺　照高院宮　―1 道澄法親王
箒木　左大臣　―2 近衛基凞
空蝉　日野前大納言　―3 日野弘資
夕顔　前内大臣　―4 徳大寺実維
若紫　醍醐中納言　―5 醍醐冬基
末摘花　飛鳥井一位　―6 飛鳥井雅章
紅葉賀　通茂　―7 中院通茂

花宴　白川二位　—8白川雅喬
葵　日野中納言　—9日野資茂
榊　烏丸大納言　—10烏丸光雄
花散里　園前大納言　—11園基福
須磨　裏松三位　—12裏松意光
明石　平松大納言　—13平松時方
澪標　東園宰相　—14園基量
蓬生　平松中納言　—15平松時量
関屋　前関白　—16鷹司房輔
絵合　妙法院宮　—17尭恕法親王
松風　梅園三位　—18梅園季保
薄雲　野宮中納言　—19野宮定縁
槿　葉川中将　—20葉川基起
乙女　石井少納言　—21石井行豊
玉鬘　松木前大納言　—22松木宗条
初音　白川二位　—8白川雅喬
胡蝶　柳原大納言　—23柳原資行
蛍　一条院宮　—24真敬法親王
常夏　西園寺中納言　—25西園寺兼敦
篝火　左大臣　—2近衛基凞
野分　右大臣　—26一条冬経
行幸　通茂　—7中院通茂
蘭　日野前大納言　—3日野弘資

槙柱　菊亭中納言　—27今出川伊季
梅枝　右大将　—28今出川公規
藤裏葉　清水谷宰相　—29清水谷実業
若菜上　庭田宰相　—30庭田重条
若菜下　三室戸右兵衛佐　—31三室戸誠光
柏木　持明院宰相　—32持明院基起
横笛　押小路中将　—33押小路公起
鈴虫　甘露寺大納言　—34甘露寺方長
夕霧　小倉宰相　—35小倉公連
御法　正親町中納言　—36正親町公通
幻　石井少納言　—21石井行豊
匂宮　飛鳥井中将　—37飛鳥井雅豊
紅梅　平松少納言　—13平松時方
竹川　内大臣　—38大炊御門経光
橋姫　清閑寺大納言　—39清閑寺熙房
椎本　中御門前大納言　—40中御門資熙
角総　藪中将　—41藪嗣章
早蕨　三条大納言　—42三条実通
蓬生　東園宰相　—43東園基量
東屋　千種宰相　—44千種有維
浮舟　愛宕宰相　—45愛宕通福
蜻蛉　梅小路民部大輔　—46梅小路共方
手習　徳大寺前内大臣　—4徳大寺実維

夢浮橋　宸翰　　―47霊元天皇

本資料は、中院通茂が官位を記載せず実名で記していることから7中院通茂がまとめたものであることが分かる。成立は従来延宝七八年ころとされており(10)、19野宮定縁が延宝五年九月一六日に没していることが問題となるが、あとは官位表記からこの推定は妥当である。

次に、この筆写目録により判明する本文の筆蹟を【図版】に示した通り御所本『三十六人集』の筆蹟と対照させて同定し(上冷泉為綱のみ自筆短冊を援用)、そこから得られた御所本『三十六人集』の筆者名を『三十六人集』の順に直して一覧にする(①から㊱及び26から1の通し番号は【図版】に対応)。

①柿本集　26一条冬経
②躬恒集　2近衛基凞
③素性集　10烏丸光雄
④猿丸集　9日野弘茂
⑤家持集　28今出川公規
⑥業平集　36小倉公連
⑦兼輔集　〔該当ノ筆蹟ナシ〕
⑧敦忠集　36正親町公通
⑨公忠集　42三条実通
⑩斎宮集　4徳大寺実維
⑪宗于集　24真敬法親王
⑫清正集　12裏松意光
⑬興風集　47霊元天皇
⑭是則集　3日野弘資
⑮小大君集　40中御門宣凞
⑯敏行集　23柳原資行
⑰能宣集　20葉川基起
⑱兼盛集　27今出川伊季
⑲貫之集　11園基福
⑳伊勢集　27今出川伊季
㉑赤人集　12裏松意光
㉒遍昭集　20葉川基起
㉓順集　10烏丸光雄
㉔元輔集　20葉川基起
㉕朝忠集　上冷泉為綱
㉖高光集　6飛鳥井雅章
㉗友則集　10烏丸光雄
㉘小町集　31三室戸誠光
㉙忠岑集　〔該当ノ筆蹟ナシ〕
㉚頼基集　〔該当ノ筆蹟ナシ〕
㉛重之集　2近衛基凞
㉜信明集　14園基量
㉝元真集　33押小路公起
㉞仲文集　20葉川基起
㉟忠見集　16鷹司房輔
㊱中務集　1道澄法親王

先の『基量卿記』天和二年正月一八日条には「諸家・門跡・摂関」とあったが、門跡として真敬法親王・道澄法親王、摂家として一条冬経・近衛基凞・鷹司房輔が指摘でき、一部に霊元天皇による宸筆も認められる。御所本『三十六人集』の作成は、霊元天皇禁裏における一大プロジェクトであったことが想像される。

さて、冷泉家本は貞享二年四月五月に祇候の近臣を動員して組織的・体系的に書写され、その数は『基量卿記』に拠ると「三百廿冊余」であったとされる。次節ではこの折に書写された御所本歌書の筆蹟について今後の究明の見通しを述べたい。

四　貞享二年四月五月の冷泉家本の転写本の筆蹟と書誌

御所本『四条宮下野集』は長らく天下の孤本とされ、活字翻刻や注釈書の底本に活用され中古和歌研究に多大に寄与してきた。冷泉家蔵本を親本とすることは従来から指摘されていた(11)が、冷泉家時雨亭文庫蔵本の影印公刊により(12)忠実な転写本であることが明らかとなった。この現在の御所本『四条宮下野集』の書写事蹟が、既に諸家により言及のある記事である(13)が、『中院通茂日記』貞享二年五月二日条に、

二日、陰、無外題不知御右筆・四条宮下野集面白集也、未終集、退出了

とある。通茂自身の書写のこととも読めるが、四月一七日条に以下のように見える。

十七日、晴、通鑑再見少々、有触、御書写物之間、明日辰之刻ニ有可参勤也

四月十七日

清閑寺大納言殿(熙房)・園前大納言殿(基福)・中院前大納言殿(通茂)・清水谷中納言殿(実業)・愛宕前宰相(通福)殿・三室戸中務大輔(誠光)・持明院中将(基福)殿・飛鳥井中将(雅豊)殿

当初はこの六人により書写が行われたようである。そして、この六人はいずれも前掲・御所本『源氏物語』「筆者目録」に名が見える。この六人の『源氏物語』の本文の筆蹟と御所本『四条宮下野集』の筆跡とを照らし合わせると、清水谷実業のそれが一致する。すなわち、御所本『四条宮下野集』の筆者は清水谷実業なのである。冷泉家本の転写であることが判明している御所本私家集の筆蹟と筆者については、御所本『源氏物語』の筆蹟と照合することで明らかになってくることが期待される。

次に先述の橋本不美男が「定家本系三十六人集」とした御所本私家集群二十種との関連について述べる。装訂が綴葉装で、表紙は飴色の花菱繋ぎの蝋染である点は、法量が異なるものの現存の御所本で『中院通茂日記』に書名が見え貞享二年の書写と知られる『左京大夫集』以下八種と合致する。よって貞享二年の一連の書写事業の中で転写されたと認められる。

なお、御所本『伊勢集』(五〇一―三九三)は、冷泉家旧蔵とされる天理大学附属図書館天理図書蔵本の転写であることが指摘されている(14)が、霊元天皇宸翰の直書外題を有し表紙は香色地に金銀の砂子・箔・野毛により雲霞を描いたものである。これは、『中院通茂日記』に書名が見え貞享二年の書写と知られる御所本『続後撰集』と同様の上法量が「定家本系三十六人集」に一致する。当該の御所本『伊勢集』も「定家本系三十六人集」に加えて考えてよいのではないか。「定家本系三十六人集」の筆蹟に関しては、本稿で問題とした御所本『源氏物語』付載「筆者目録」

を通じて窺見する限り御所本『三十六人集』や同『四条宮下野集』等とは異なるようである。

五　おわりに

以上本稿では御所本『三十六人集』の書写年次を天和二年正月以前に書写され同正月に成立したと推定した上で、同時期の筆蹟であり付載の「筆者目録」により筆者が判明する御所本『源氏物語』の筆蹟と照合・同定した上で筆者名を明らかにしてきた。御所本『三十六人集』は霊元天皇の禁裏における個別の複写事業として成された一大プロジェクトであったと思われる。禁裏の書写活動は貞享二年四月五月の冷泉家本の大量な転写へと引き継がれたのであろう。これら御所本に含まれる冷泉家本を転写した私家集群は、筆蹟を通じてみる限り時期的に幾重にも積み重なっており、今後も究明を続けていきたい。

注(1)島田良二『平安前期私家集の研究』（桜楓社、一九六八）、島田良二・千艘秋男編著『御所本三十六人集本文・索引・研究』（笠間書院、二〇〇〇）。

(2)前掲注(1)島田・千艘編著。なお、冷泉家時雨亭文庫蔵擬定家本私家集の出現により親本の修正が提唱されている。藤本孝一「擬定家本私家集について」（冷泉家時雨亭叢書第七四巻『擬定家本私家集』解題〈朝日新聞社、二〇〇五〉）、同『本を千年つたえる冷泉家蔵書の文化史』（朝日新聞出版、二〇一〇）。

(3)拙著『禁裏本歌書の蔵書史的研究』（思文閣出版、二〇〇九）。

(4)橋本不美男「御所本三十六人集解説」（『宮内庁書陵部蔵御所本三十六人集　全三十六巻複製』〈新典社、一九七一〉）。

(5)前掲注(2)藤本解題。

(6)前掲注(3)拙著。

(7)前掲注(4)橋本解説。

(8)島田良二・千艘秋男編著『御所本三十六人集[二十家集本]本文・索引・研究』（笠間書院、二〇〇四）。

(9)田島公「近世禁裏文庫の変遷と蔵書目録―東山御文庫本の史料学的・目録学的研究のために―」（田島公編『禁裏・公家文庫研究　第一輯』〈思文閣出版、二〇〇三〉）、久保木秀夫「書陵部御所本による冷泉家本の復元」（前田雅之編『中世の学芸と古典注釈』〈竹林舎、二〇一一〉）。

(10)宮内府図書寮編『図書寮典籍解題文学篇』（国立書院、一九四八）。

(11)犬養簾・橋本不美男遍『笠間影印叢刊御所本四条宮下野集（宮内庁書陵部蔵）』（笠間書院、一九七一）「解題」の指摘。

(12)冷泉家時雨亭叢書第一九巻『平安私家集六』（朝日新聞社、一九九九）。

(13)石田実洋「冷泉家時雨亭文庫所蔵『朝儀諸次第』と高松宮家伝来禁裏本」（『書陵部紀要』第五三号、二〇〇二・三）。

(14)天理図書館全本草書和書之部編集委員会編天理図書館善本草書和書之部第四巻『平安諸家集』「伊勢集」解題（橋本不美男執筆）（天理大学出版部、一九七二）

【図版】

桐壺
1道澄法親王

村上先帝御時御屏風
の歌 四こうの名ある所
とゝをゝまひてゝ
ゝにゝ
ゝの山
ゝゝやまゆきまいあるきつゝ
かゝみさゝるゝゝゝゝゝ
いすれゝ
いすのゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
伏見のこと
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

帚木
2近衛基凞

三位大貳小野宮大殿のゐむすめこなりけるを殿しはらくはかの宰相をとりてそまにやしなひたてまつれりけるを人々もてはやしきこえけるを
きこえいとりてきこえけるをかくやしきこえふおほえぬるをなんいとりてきこえけるをかくやしきこえふおほえぬるをなんいとりてきこえけるをかくやしきこえふおほえぬるをなん

空蟬
3日野弘資

春

やなぎ　さくら　もゝ　まつ　うゝ　ひす

ていゝ乃院のこのしたの　梅

動　あさ　ことわりめてみれはあらやまの
いろはさくらの花やとくん

山はさくらの花はたえぬ

古　かわとはおけはなるのはくを
いさやしらてちるまてはみむ

せむさいのなりあるてよさきくる
を見て

模　さくら　花けふはくんてんくもりけり
よもすがらのはとてちるさくら哉

花おしむとくるまて
かはる人はいとせのくるはくるまて哀
いつのはとしれいろまあくつき

亭主院乃茶会て

拾　さくれのいろはうつりてあかつきやま
吉はもとなんのちりみてく

おれ　うくあるを　もい

拾　みちせはなるそふもいとしわ

夕顔
4徳大寺実維

斎宮女御集

ちるさくらとはいはるるをはてはとも
はきこえさせしまくれば女三宮

へてけるきてきそえれはやまきれ
るこころともいはしへきこれ
たはんろし　女御殿宮
いそあまをいるこうかたくらるの
ゑやえしやまふきのくる
かりとむらさめはおとろをはていそ

きわしてを出ます
あえ見ハミつさのやまもあるものを
まつきてさはくいをのへるる
女御殿うをしまして斎院の出ふ
らしの内の斎宮
おあえねなんしのふらいるをて
うはまくあくのきえそしぬき
まつのかをたまへうつのはとあ
こえりしるかとるれはをりしまれ
て川とえて

⑩斎宮集

末摘花
5飛鳥井雅章

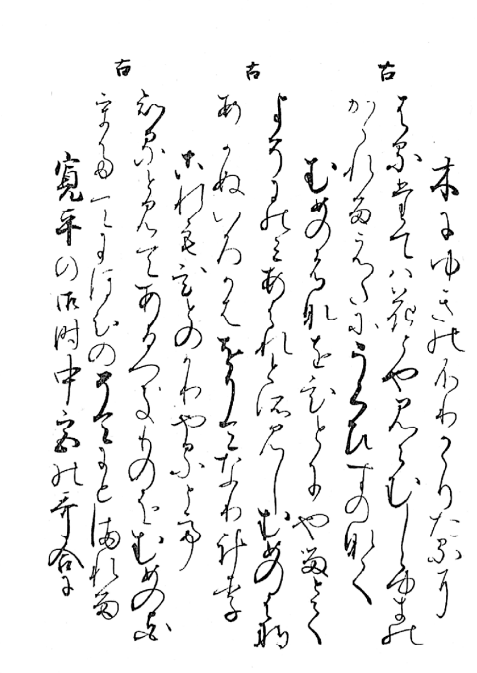
十月十九日

㉖高光集

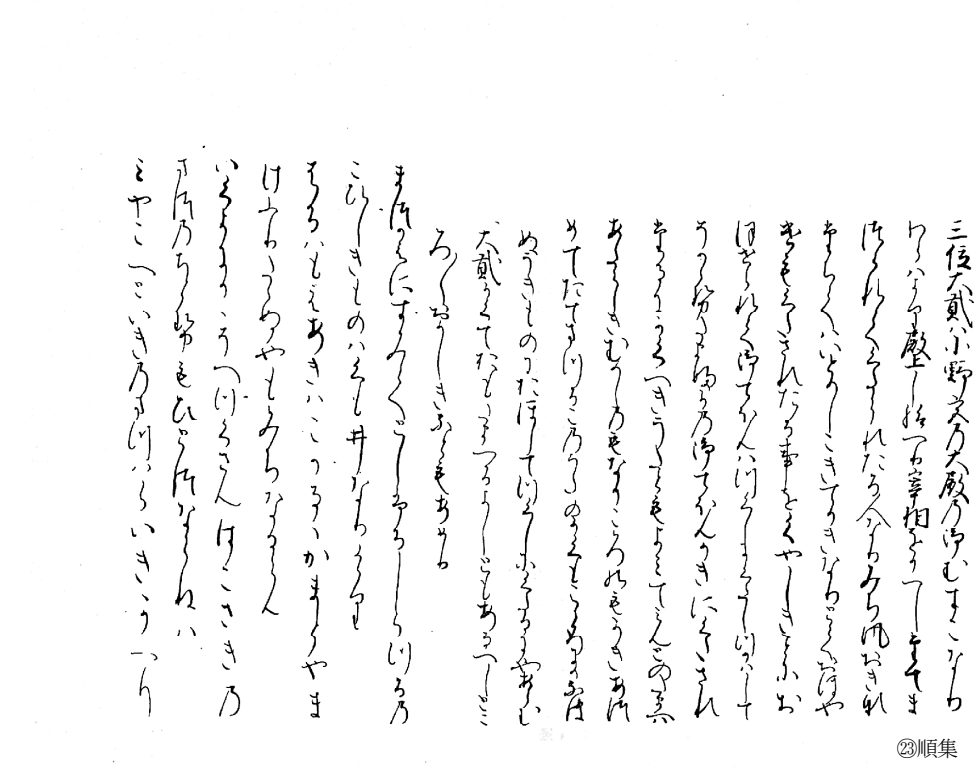
葵
9日野弘茂

④猿丸集

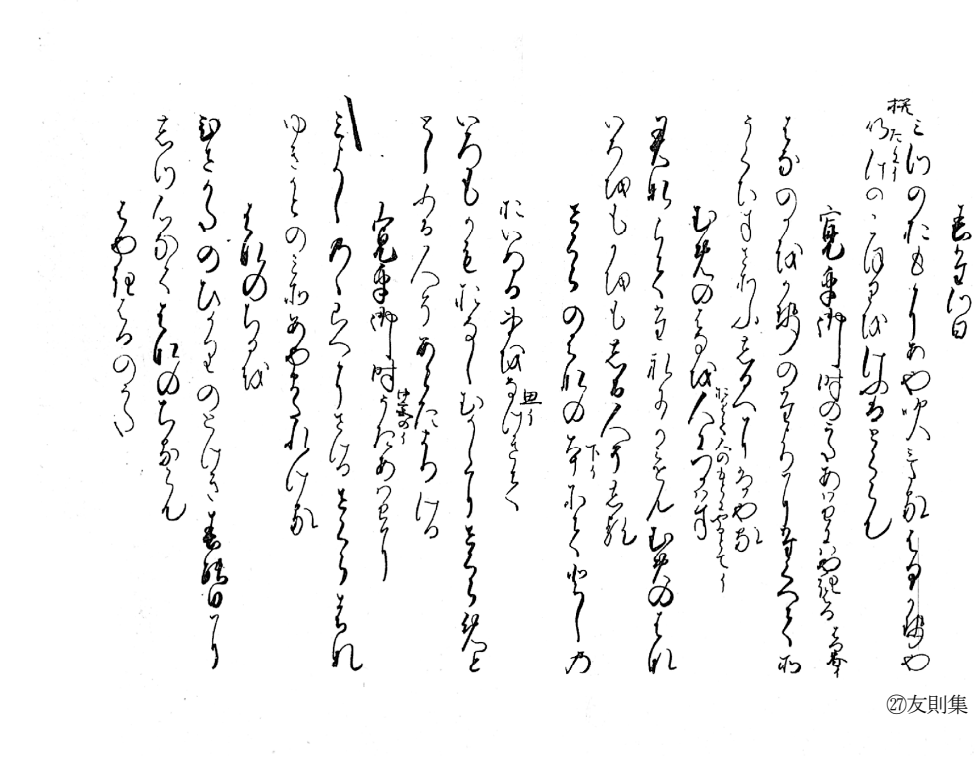
榊
10.烏丸光雄



③素性集



㉓順集



㉗友則集

花散里
11園基福

貫之集卷第一

延喜五年尚侍被奉泉右大将時御
屏風依内裏仰奉之

雪ふる所

延喜十年月次御屏風十帖詞
所々首内侍勅撰

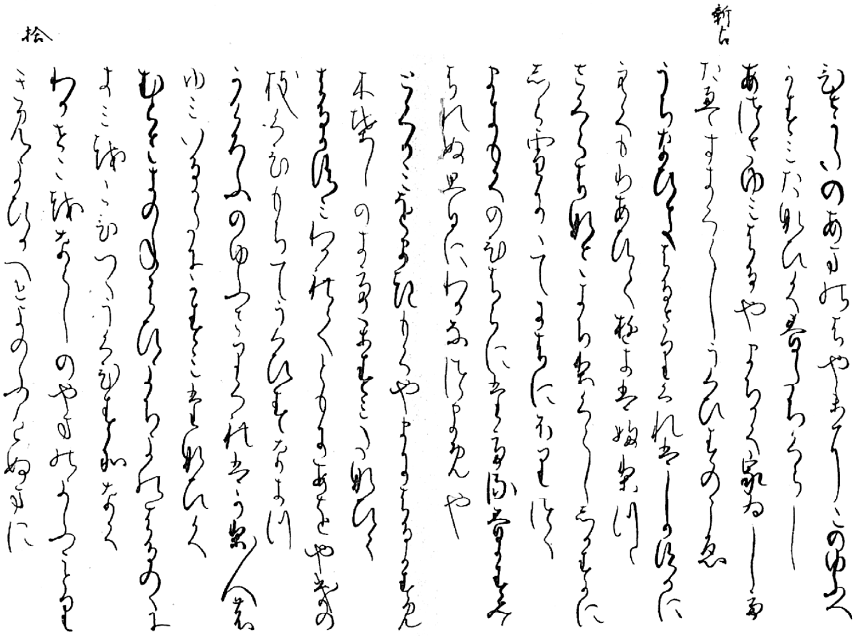
二月

三月

山田さへまうのはつかりなれ

須磨
12裏松意光

⑫清正集



㉑赤人集

澪標
14園基量

亭子院うをさそはせたまふ時ふくさて

ころもをるそこにてをりて　菊の花
おりてはさむとおもひしをりはやな

まろ乃とし侍りてふ

ゆくさきよりこそ思ひみちはさいて、
をのつからへなるわしとて

村上の御時ふくの乃うさ所
こを御屏風の乃うをしまし

てかすの野

かすの野のくりこ物をもりて。
まろんもるばわれもしらんん

みくまの

うさことをやまとちらはろねこし
われらくまはいとやとるまし

なつ二ほ乃し

もろたなるよしいなの二ほなむ
わつミに人ハせもくとろく

なるハえ

我こしるはれあ一の十二ほをみや

㉜信明集

関屋
16鷹司房輔

忠見集

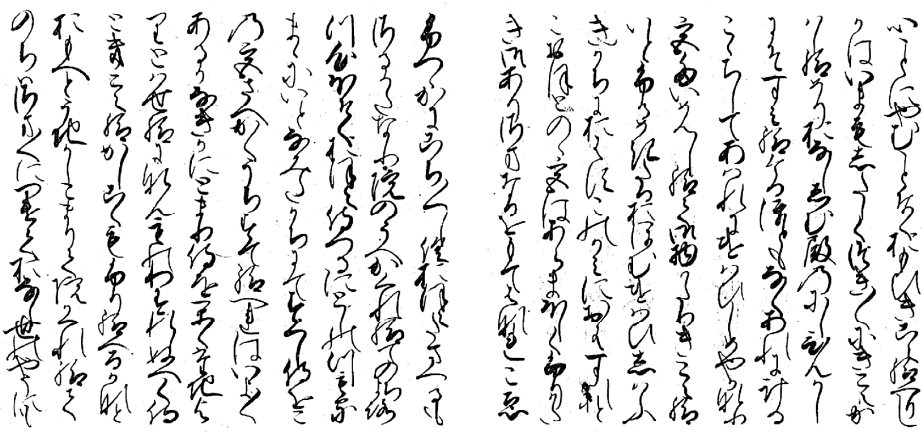
35忠見集

胡蝶
23柳原資行

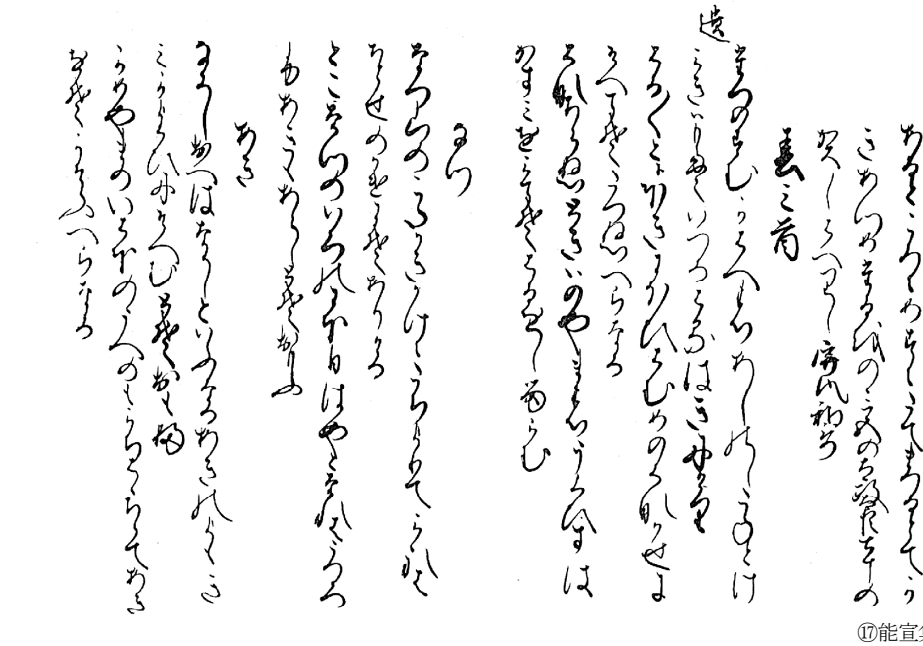
敏行朝臣集

⑯敏行集

螢
24真敬法親王



槿
20葉川基起



⑰能宣集

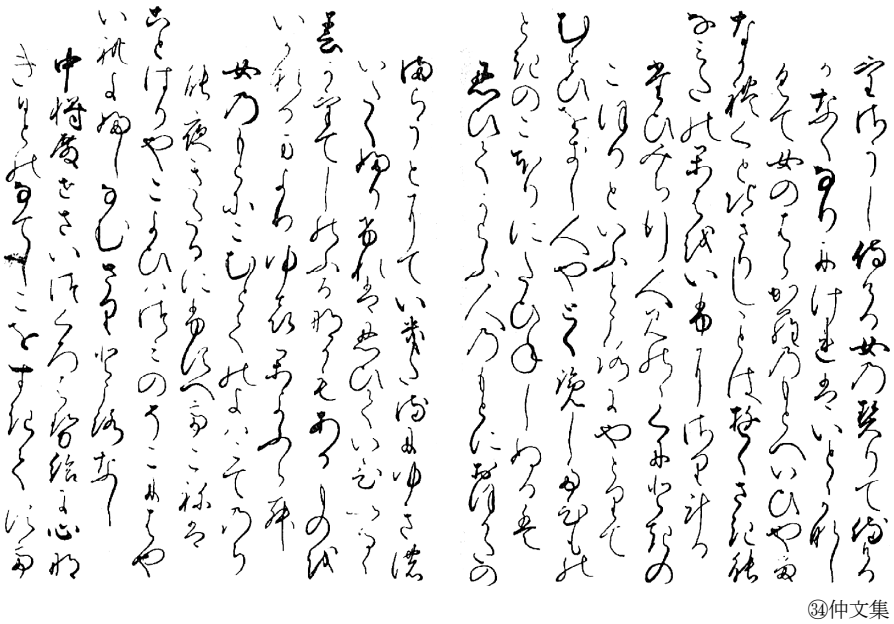
春

②遍昭集

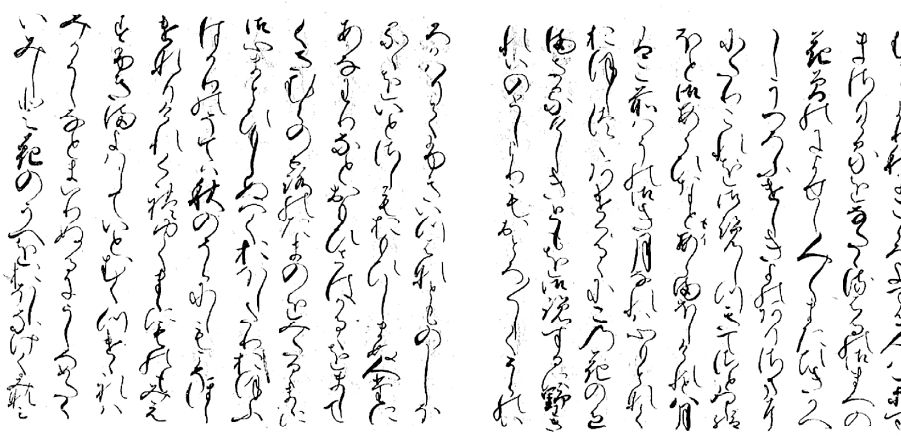
肥後守清原元輔よりたのまれてあるさ
あひのくはしき女の御門に侍時
紅葉ばのいとをもさこそ侍らめ
おなじやうにこのやまのやまのもみぢ葉に
おもひをのこしこころはなとは聚
なしけるかうはしのきこえ
さこそはへるものこころをとゝのへ
物はなくなるのこゝろよ
こゝろはつゝ
そらにあれはなほうたがはれ
なにちよりおもひをこゝろのこれ

三月三日に
うぐひすのこゑ
ちるはなはなにとゝまらぬ
ふるさとのはるこそかはらぬ
はるをいかにこゝろはつゝ
いはのうへにねをのこしけと
おなじ御門の前合に哥
をこゝろのこゝろはなさはつゝのる

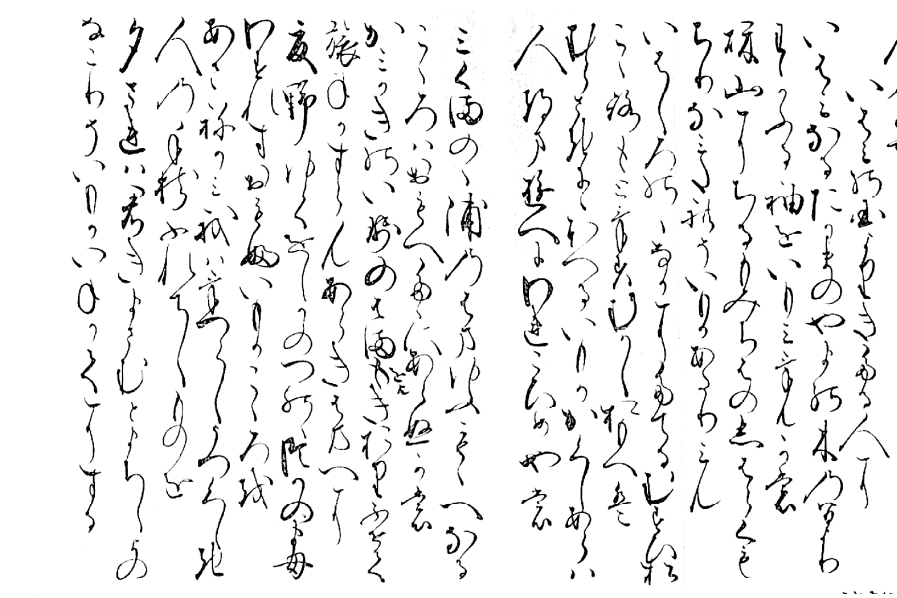
㉔元輔集



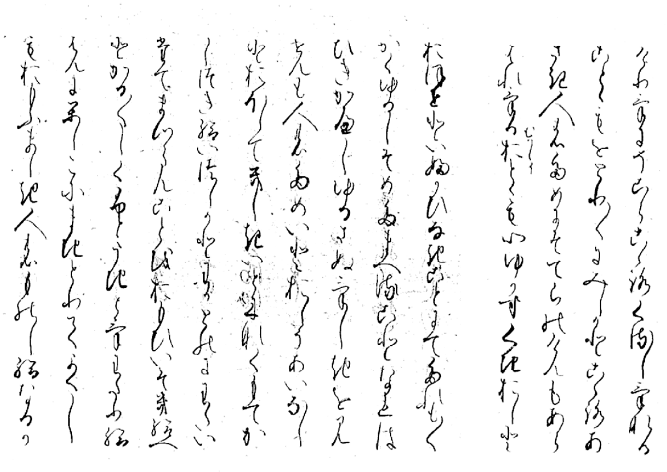
㉞仲文集



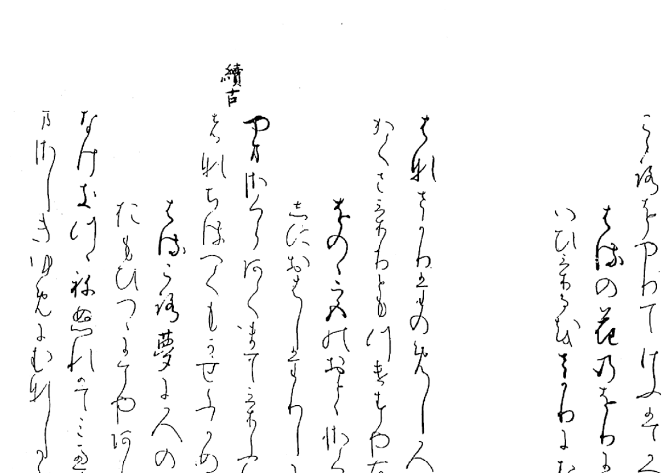
野分
26一条冬経



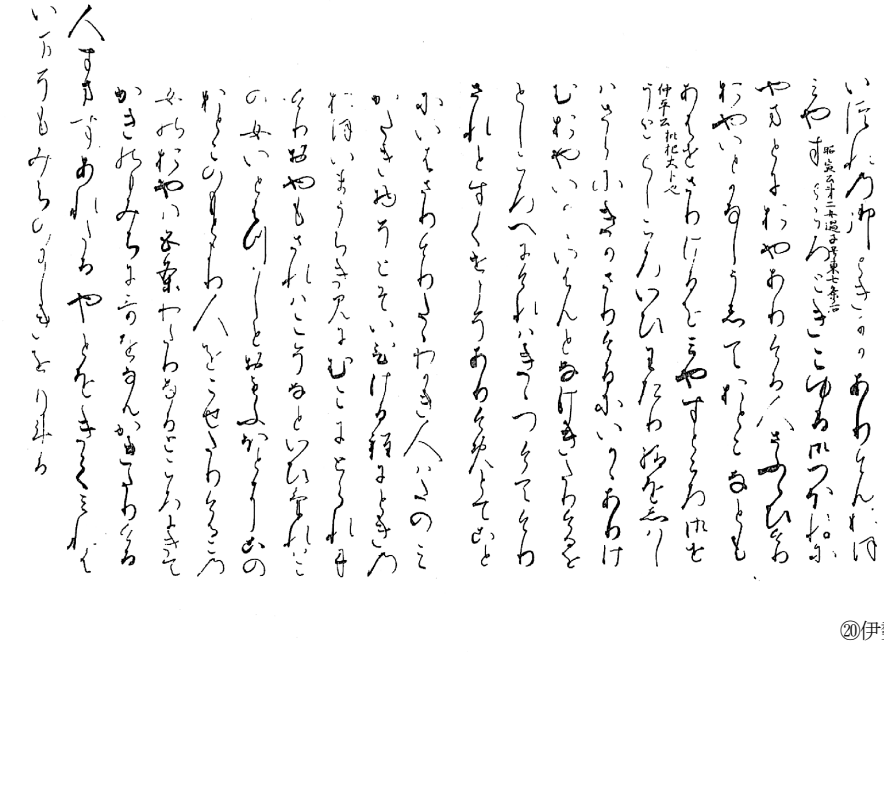
①柿本集



真木柱
27今出川侍季



⑱兼盛集



⑳伊勢集

梅枝
28今出川公規

早春

月よ見もいまし冬なかわしうすゝに
かすみくるひくるはきぬとの
遺
撰
ゆくこうゝ　はるれしゝうるゝすん
こうゝ　みやまるゝやしるけり
いすゝ　この元のうゝけんすきれる
かすこるひくるはきぬし
けるゝすこゝ川かすゝみゝゆきうり
われゝあるゝむゝやゝこゝのゝる
うゝるいくゝるはきぬゝわゝとハ
やすきのゝれうゝしするきゝ
あゝさゆゝこゝるゝちくゝ並ゝして
きゝゝをきくゝんうくゝすゝこゝ
さゝむさゝすきゝるゝハきぬゝゝと月ハ
あくくまゝれゝもゝ人ゝゝわゝゆくゝ
むゝゝのゝれゝさきゝうゝなくくゝゝくゝるゝを
こゝゝやゝこゝれゝるゝゆきゝをまゝくゝを
あくくゆきくゝむくゝさきゝをくゝるゝむゝの花
君ゝゝわくくゝはくくゝくゝをくゝん
むゝをくくゝるゝゝゝわゝたゝゝゝゆきゝをくゝゝミゝを

⑤家持集

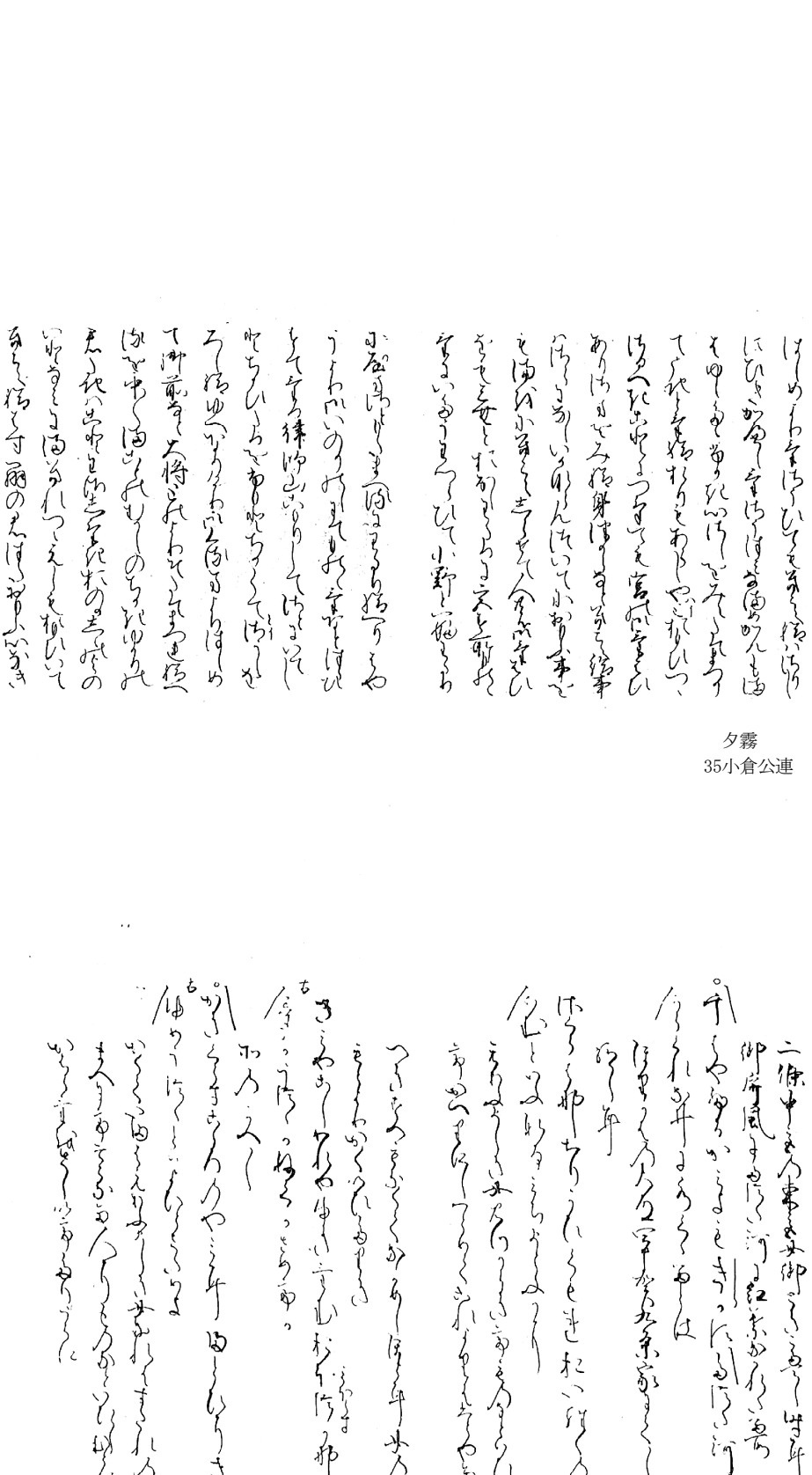
若菜下
31三室戸誠光

㉘小町集

横笛
33押小路公起

㉝元真集

夕霧
35小倉公連



⑥業平集

御法
36正親町公通

⑧敦忠集

椎本
40中御門宣澈

⑮小大君集

早蕨
42三条実通

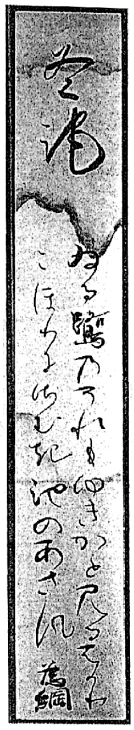
⑨公忠集

夢浮橋
47霊元天皇

寛平御時八中宮の位争合し

春風

⑬興風集



上冷泉為綱自筆短冊（センチュリーミュージアム蔵）

村上院のこの御時の歌合

左つはん

くもゐのやまのいはかねをのすみ
をはこしやたはくこむ
うぐひす

わかやとのむめのえだにあくるひそめ
かせのこすはよ香をやとめこ
ほたるん

むさきこにちるあんちなんちりて
はるのくれもくれはる
くれ雪

ちるもちりてはるくれのあをとを
をはるはなくはたりそもりやね
こひ

新古

人はこををををふるわぬの
ここもるるのこひやはたん
あるるのしををををあはるる

權

をとをををををををををををを
朱雀院の姫宮の御かきの御屏
風に

藤裏葉
29清水谷実業

御所本『四条宮下野集』